

腰痛サポートダイヤル 開始から一年を振り返って

急性期病院の入院対象にならず、自宅でお困りの圧迫骨折の方を対象に満を持して開始しました「腰痛サポートダイヤル」も皆様のご協力を賜りまして無事、一年を迎えることができました。

このシステムは、脊椎圧迫骨折でお困りの方の相談窓口として、地域の医療機関や居宅介護支援事業所・地域包括支援センターなどより、お電話をいただいたその時から院内では医師をリーダーとする「腰痛入院受入れシステム」が動き出します。概ね当院から車で 30 分圏内ならば、当院サポートカーがお迎えに伺います。サポートカーの迅速な出勤が困難な場合や、出勤圏外の方につきましては提携を組んでいる介護タクシー業者に依頼しお迎えに伺います。

この一年で 31 の医療機関から計 95 件の入電を、22 の居宅支援事業所・地域包括支援センターから計 44 件の入電を頂きました。他、ご家族・ご本人からの入電などを含めた結果、昨年 9 月から今年 8 月迄の 1 年に延入電数 166 件、内 106 人の方にご入院いただく事ができました。中には問合せのみや、ご本人の入院に対する心の準備ができていない、医師が急性期の治療を優先と判断した場合などは、入院に至りませんでした。100 人余りの方に入院リハビリを提供し、寝たきり防止に貢献できたことを喜ばしく思うと共に、迅速な入院対応に繋げるための地域の皆さまのご理解、ご協力に心から御礼申し上げます。

「腰痛サポートダイヤル」開始から一年を振り返りますと様々な紆余曲折がありました。事務局を預かった当部署としましては頭を抱える難題が次から次へと湧き出てきては対策に追われる日々でした。システム構築から運用に至るまで病院中の全職種が丸となり試行錯誤してまいりました。



今年 2 月から最後の療養病床一棟を転換し、全床回復期リハビリテーション病床となった当院は『次のステージへ 新たなチャレンジ』をスローガンに変革を続けてきました。腰痛サポートシステムの導入による現場の動きは急性期病院の救急対応さながらで今までの回復期・慢性期としての現場の動きを根元的に変えるものでした。「サポートダイヤル」である以上、迅速な対応が求められます。開始当初は、あらゆる部署で業務が混乱し課題が絶えることなく湧き上がっては厳しい意見が寄せられ、皆が必死だったからこそこの議論が飛び交いました。このシステムを運用していくためには院内の多職種間連携・協働・理解が欠かせず「腰痛サポートダイヤル」という、大きな山に皆で挑みました。

そして、一年が経ち、今や腰痛サポートダイヤルからの入院数は入院依頼総数に対して 16.5%を占め、当院の病床稼働に大きく貢献する一大事業となりました。

未だ課題が全て解消されたわけではありませんし、現在進行形で試行錯誤の日々は続いています。それでも、一人でも多くの方の手助けになれるよう、当院は日々前進しております。「腰痛サポートダイヤル」を利用してくださったご本人や関係者の皆さまからの励ましのお言葉を頂戴する度、努力が実りつつあることを思わず全職員に聞こえるよう館内放送したくなります。

当部署も「腰痛サポートダイヤル」窓口として、まだまだ未熟で地域の皆さまにはご迷惑をおかけすることが沢山あるかと存じますが、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(地域連携部 地域連携課長 上嶋美由紀)

地域の医療従事者公開リハビリテーション研修会
「ベッドサイドの高次脳機能障害学」
講師：武田克彦 文京認知神経科学研究所 所長
日時：平成 30 年 12 月 4 日 (火) 17:30～
場所：当院 5 階 地域研修センター
～お気軽にご参加下さい～